
‘怒’の感情表現に関する日韓両国語の認知分析

宋 誓 天

1. はじめに

第二言語の習得において母語の習慣が転移 (transfer)⁽¹⁾し、干渉することによって誤りが生ずることがある。日本語に酷似している韓国語を母語とする話者にとって言語転移による誤りは文法や語彙だけに限られない。特に慣用表現は、その言語を母語とする人々の思考様式や伝統などが反映されているもので、たとえ、人間が共通に有する感情の表出であっても、異なる言語文化においてはその伝達形態が違ってくる。そこで「組み合わせと意味が社会習慣的に固定している単語連結」である日本語の慣用表現の学習における母語干渉による誤りの実態やその教授法を新たな問題として考える必要がある。

Kövecses (1995 : 195) は「①文化が違うと感情語も異なる」と「②文化の違いに感情語は左右できない」という相反された二つの予測について「感情の概念化とその表現を決定しているのは文化的歴史か、それとも生理的か」を考察し、「怒りの概念には文化と生理の双方が影響している」と結論付けている。日本社会には、感情をあらわにすることははしたないことであるという通念があり、中でも特に怒りは表に出してはならないという暗黙のルールがある。それに比べ韓国語話者の感情表出は激しい方であると言えよう。実際に韓国人日本語学習者が日本語で感情を表す際、日本語母語話者側は違和感を感じたりするなどの場合は往々にしてある。

そこで本稿は、人間の基本感情のうち‘怒’を表す慣用表現を用いて日韓両国語の慣用表現における共通点や相違点を考察し、‘怒’の感情に対する両言語話者の認識を調査してみる。

2. 先行研究と問題提起

日本語の感情表現に関する先行研究を探る際、身体語彙の慣用表現研究を排除することはできないだろう。それに関して和田 (1969 : 107) は「身体語彙による表現の大部分は、単なる感覚感性だけの言語でなく、この語が発せられる限

り、いつもその背後に人間の息吹があり暮らしがあり、したがってまたその反応内容には、それを語るものの内的世界が写し出される」と説いている。

河原(1998:82)は「環境によって、気分と感覚の不均衡が一定以上になると、感情が自覚的・無自覚的に表出する」と述べ、‘快’の感情表現より‘不快’の感情表現が多いと論じた。それは、‘不快’の感情は生命維持に不可欠な警告であることが多く‘快’の感情は生命の安全を基礎とした、余裕のある文化的な指標であることが多いためであると考えられ、あるいは日本語母語話者の民族感情のベースにある無常感や、配慮に欠けた感情表出(特に喜びの表出)を慎む倫理感(生活態度)によるのかもしれないという。

認知言語学の観点からの研究は馬場(2001, 2002)が挙げられる。馬場(2001)は、怒りを表す直接表出表現のふるまいと意味特徴について記述し、‘ムカツク’に関して比喩との関連性を指摘している。また、馬場(2002)は‘腹が立つ’の分析可能性を示すことに主眼を置き、‘腹’を‘精神的研鑽を積んだ内的自己’が宿る場所と捉える考えが‘動機付け’となり、この‘腹’と‘立つ’との結びつきが慣習化され、固定化された(怒りの)表現として確立されたと考えられると述べている。

しかし、日韓両国語の比較研究においては主に身体語彙を中心とした統語分析に偏っており、喜怒哀楽のような人間の基本感情に重点を置いた研究はあまり見られない。そこで、本稿は日韓両国語の‘怒’の感情表現を比較分析することで、各々の慣用表現における認知傾向や両言語の相違点などを明らかにすることを目的とする。

3. 調査概要

3.1 ‘怒’の下位範疇

人間の‘怒’という感情は時代や文化を超越した人間共通の経験の一部分である。辞書(2)では‘怒’の概念について次のように記述されている。

『日本国語大辞典(第二版)第9巻(2001:878)』

① いきどおる, おこる, いかる ② 勢いがさかん, はげしい

『大漢語林(1982:514)』

① いかる, おこる ㉞いきどおる, 腹を立てる, ⇔喜 ㉟しかる
(叱), せめる(責) ㊱はげむ, 奮い立つ ㊲た
けりたつ, 荒れ狂う, 激する「怒涛」

② いからす, ㉞おこらせる ㉟いかめしくする, はげしくする「怒目」

③ いかり, おこること

また、先行研究の基本感情の分類においてはそれぞれの概念や下位範疇はまちまちである。中村（1979）は、10類の基本感情を立項し、そのうち‘怒’の下位範疇を「立腹、憤る、癪、不機嫌、どなる」と分類している。このうち、「不機嫌」は‘怒’より‘嫌’の感情に近く、立腹や憤るなどの境界が明らかでないと思われる。一方、韓国語の金香淑（2003：49）⁽³⁾は、基本感情を6類に分けて、‘怒’の下位範疇としては「怒り、激憤」しか挙げていない。これらを検討し、本稿では‘怒’の下位範疇を「憤怒・悔恨・叱責・興奮」とした。

3. 2 調査方法およびアンケートの構成

本稿の慣用表現の収集においては、実際に文脈の中で慣用表現として使われた表現を中心とするため、主に日本語の小説を資料とした。韓国語の場合は、日本語の用例資料となった小説の翻訳書と金香淑（2003）を用い、日韓の一方にしかないもの場合は慣用表現関連の辞書も参考とした（【用例資料】参考）。

本調査で用いるアンケートは大きく「日韓の共通表現・日本語の固有表現・韓国語の固有表現⁽⁴⁾」に分けてある。それぞれの調査は‘共通-J、共通-K’と‘固有-J、固有-K’と明記することにする。いずれも、アンケートに提示された相手国の慣用表現を読み‘喜・好・怒・哀・驚・嫌’のうち、それぞれの意味であると思われる感情を答えさせる調査方法である。各々の感情の慣用表現ごとに‘共通表現’が三つずつ、‘固有表現’が七つずつで、一つの感情ごとに十個ずつの慣用表現を提示しているため、総60個の慣用表現に答えてもらう仕組みになっているが、本稿では‘怒’の分析だけを扱うことにする。因みに、アンケートに取り上げられた慣用表現の使用適合の可否については、日本語教育に携わっている日本語母語話者のチェックを受けたものである。

3. 3 調査対象

本調査は、日本語母語話者72名および韓国語学習者180名の、合計252名を対象として行った。日本語母語話者（以下Jとする）は大学生や一般社会人で構成され、韓国語学習者は高校生（初級者）と大学生（中級者）で構成されている。初級学習者（以下kaとする）の全員は、韓国の現行の教科課程に基づき週

<表1> アンケート資料総数および内訳 (単位：人)

日本語母語話者	大1年	大2年	大3年	大4年	一般人
72	4	22	28	10	33
韓国語日本語学習者	高2年	高3年	大3年	大4年	一般人
初級学習者-90	24	66	・	・	・
中級学習者-90	・	・	56	34	・

当たり2時間の授業を行なっている女子高等学校の2年生と3年生である。中級学習者（以下 kb とする）は、週当たり平均9時間の大学における日本語教育を受けている日本語文学関連の専攻の3年生と4年生で構成されている。被験者の詳細は前頁の〈表1〉に示す。

4. 調査結果と分析

4. 1 身体語彙の慣用表現

本調査で収集した‘怒’の感情表現は総90個である。日本語の慣用表現が52個、韓国語の慣用表現が53個で、そのうち共通表現が15個である。身体語彙が用いられたものは日韓両国語に各々71.2%（37個）と71.7%（38個）を占める。次の〈表2〉は本調査で得られた慣用表現を中心とした下位範疇とその数を表したものである。因みに表の‘身体’とは身体語彙が用いられた慣用表現を表す。

〈表2〉 ‘怒’の下位範疇とその数 (単位:個)

怒の感情	共通の慣用表現		日本語固有の慣用表現		韓国語固有の慣用表現	
	総数	身体:他	総数	身体:他	総数	身体:他
憤 怒	5	5:0	21	12:9	16	10:6
悔 恨	5	5:0	5	4:1	6	4:2
叱 責	3	2:1	8	5:3	9	3:6
興 奮	2	2:0	3	2:1	7	7:0
合計:90	15	14:1	37	23:14	38	24:14

4. 2 共通表現におけるJとKの比較分析

日韓の怒を表す共通表現に挙げられたのは‘頭に血が上る／머리에 피가 올라오다・唇を噛む／입술을 악물다・雷が落ちる／(불)벼락이 떨어지다’で

〈表3〉 ‘怒’の共通表現に対するJとKの回答数の比較 (単位:個(%))

‘怒’の共通表現		JとKの回答数					
		喜	好	怒	哀	驚	嫌
頭に血が上る	J	0 (0.0)	1 (1.4)	69(95.8)	0 (0.0)	1 (1.4)	1 (1.4)
	K	1 (0.6)	0 (0.0)	146(81.1)	3 (1.7)	15 (8.3)	15 (8.3)
唇を噛む	J	0 (0.0)	1 (1.4)	48(66.7)	16(22.2)	3 (4.2)	4 (5.6)
	K	3 (1.7)	8 (4.4)	125(69.4)	14 (7.8)	11 (6.1)	19(10.6)
雷が落ちる	J	0 (0.0)	0 (0.0)	55(76.4)	0 (0.0)	17(23.6)	0 (0.0)
	K	0 (0.0)	0 (0.0)	51(28.3)	12 (6.7)	102(56.7)	15 (8.3)
合計(平均)	J	0 (0.0)	2 (0.9)	172(79.6)	16 (7.4)	21(9.7)	5 (2.3)
	K	4 (0.7)	8 (1.5)	322(59.6)	29 (5.4)	128(23.7)	49 (9.1)

注) Jの回答数の合計は216個(100%)で、Kの回答数の合計は540個(100%)である。

ある。(以下、韓国語訳は略す。)前頁の〈表3〉は、日韓の共通表現におけるJとKの答えをまとめたものである。それぞれの下線部は、もっとも多い回答数が得られた感情項目を表す。

JとKのそれぞれの平均正解率は79.6%と59.6%で、両国の共通表現であっても、日韓の認知様相には異なる点が見られる。特に‘唇を噛む’の表現において、Jは、怒(66.7%)の次に哀(22.2%)の感情であるという答えが後についている。しかし、Kの答えは、怒(69.4%)の次に嫌(10.6%)・哀(7.8%)・驚(6.1%)などに分散している。

また‘雷が落ちる’の項目において‘怒(叱責)’であると答えたのはJが76.4%を占めるのに比べ、Kの場合は‘怒’が28.3%に過ぎず、56.7%が‘驚’と答えた。これは、怒の低位範疇である‘叱責’の意味で使われる慣用表現としてでなく、語義的な意味による自然現象として捉えられたためであると思われる。

4. 3 固有表現におけるJとKの比較分析

4. 3. 1 韓国語の固有表現におけるJの分析

怒を表す韓国語の固有表現におけるJの平均正解率は45%となる。被験者Jを対象とするアンケートには、韓国語の固有表現のうち「눈이 시퍼렇다(目が真っ青だ)・복장이 터지다(腹臓がやぶれる)・피가 거꾸로 솟다(血が逆にほとばしる)・눈에 불을 켜다(目に火を点す)・얼굴이 붉으라프르락(顔が赤くなったり青くなったりする)・열을 받다(熱を受ける)・칼을 갈다(刀を研ぎ澄ます)」が提示されている。

次の〈表4〉は、怒の感情を表す韓国語の固有表現におけるJの回答数である。

〈表4〉 韓国語の‘怒’の固有表現におけるJの回答数 (単位:個(%))

‘怒’の固有表現	Jの回答数					
	喜	好	怒	哀	驚	嫌
目が真っ青だ	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (1.4)	34(47.2)	24(33.3)	13(18.1)
腹臓が破れる	52(72.2)	1 (1.4)	15(20.8)	0(0.0)	4 (5.6)	0 (0.0)
血が逆にほとばしる	0 (0.0)	4 (5.6)	63(87.5)	1(1.4)	1 (1.4)	3 (4.2)
目に火を点す	1 (1.4)	7 (9.7)	60(83.3)	3(4.2)	1 (1.4)	0 (0.0)
顔が赤くなったり青くなったりする	0 (0.0)	13(18.1)	34(47.2)	1(1.4)	24(33.3)	0 (0.0)
熱を受ける	4 (5.6)	36(50.0)	16(22.2)	5(6.9)	10(13.9)	1 (1.4)
刀を研ぎ澄ます	1 (1.4)	11(15.3)	38(52.8)	6(8.3)	7 (9.7)	9(12.5)
合計(平均)	58(11.5)	72(14.3)	227(45.0)	50(9.9)	71(14.1)	26 (5.2)

注1) Jの回答数の合計は540個(100%)である

注2) 表には韓国語の言語表記を省略し、著者による日本語訳だけを記す。

そもそも‘感情’というのが、実際の人間の交感神経や血圧、皮膚などの身体とかかかわっているため共通反応が多いが、それを表す両言語には少々の相異点が見られる。特に「피가 거꾸로 솟다(血が逆にほとばしる)」の正解率(85.5%)は、本調査の項目のうちもっとも高い比率となる。逆に誤答率が高かったのは「복장이 터지다(腹がはじける)」となり、Jの72.2%が‘喜’であろうと思っているのが分かる。

一方、‘怒’は熱・火・爆発などによく比喩されるという共通点が見られる。しかし「눈에 불을 켜다(目に火を点す)」の正解率が80%以上で非常に高く測定された反面、「열을 받다(熱を受ける)」に対し‘好’と答えたのが50%にも至った。また、Jの72.2%が‘喜’であろうと答えた「복장이 터지다(腹臓が破れる)」は日本語の「胸が煮える」と類義で使われる韓国語の固有表現である。構成語彙である「복장(腹臓)」とは、体の胸の真ん中を示す身体語彙であるが、実際には本心や思いを抱いている胸中の意味である。

怒の感情表現は色彩とも関わる。韓国語の場合、「赤・青・白」の顔色は怒や驚の感情を表すが、目の色に使われる「青」は怒の感情に限られる表現である。金泰憲(2001:60)⁽⁵⁾は韓国語の「青」が単独的に憤怒を表すとは言いがたいと述べているが、金香淑(2003:128)は憤怒の慣用表現で「눈이 시퍼렇다(目が真っ青だ)」の例を挙げている。Jの答えを見てみると、「눈이 시퍼렇다(目が真っ青だ)」の表現に対しては哀(47.2%)と驚(33.3%)の答えが、単色でない「얼굴이 붉으락푸르락(顔が赤くなったり青くなったりする)」には怒(47.2%)と驚(33.3%)の答えが後につづいた。

韓国語の怒の感情の特徴として「한(恨)」が挙げられる。「한(恨)」という感情は、日本語でいう恨みや悔しさなどの感情ではおさまらない韓国語固有の感情であると言える。「칼을 갈다(刀を研ぎ澄ます)」とは、その한(恨)の対象に対する攻撃準備を内面的に整えるという感情を実際の武器である刀に譬えられたものである。この慣用表現に対しJの52.8%は怒の感情であると答えているが、好(15.3%)や嫌(12.5%)などの答えも少なくない。これは怒の感情を、「歯軋りをする、拳を握る」のように人間の攻撃性で表すのは日韓共通であるが、日本語には、刀のような実際の武器に譬えられた怒の感情表現が見当たらないためであろう。

4. 3. 2 日本語の固有表現におけるKの分析

被験者Kを対象とするアンケートには日本語の固有表現の「目を剥く・腹が立つ・肝を煮る・頭に来る・色を作す・臍を噛む・大目玉を食う」の例を取り上げた。Kの正解においてもっとも正解率が高いのは「頭に来る・腹が立つ・肝を煮る」の三つのみで、怒の平均正解率は27.3%にしか至らない。韓国語とは全く異なる構成語彙でなっているにも関わらず、正解率が50%前後を占める「頭に

来る・腹が立つ」については「5.3.3」のkaとkbの比較分析で考察することとし、ここではKの母語転移について考えることにしよう。

次の〈表5〉は、怒の感情を表す日本語の固有表現におけるKの回答数である。

〈表5〉 日本語の‘怒’の固有表現におけるKの回答数 (単位：個(%))

‘怒’の固有表現	Kの回答数					
	喜	好	怒	哀	驚	嫌
目を剥く	7 (3.9)	14 (7.8)	49(27.2)	10(5.6)	60(33.3)	40(22.2)
腹が立つ	8 (4.4)	11 (6.1)	79(43.9)	5(2.8)	63(35.0)	14 (7.8)
肝を煎る	0 (0.0)	8 (4.4)	63(35.0)	14(7.8)	47(26.1)	48(26.7)
頭に来る	4 (2.2)	13 (7.2)	93(51.7)	4(2.2)	28(15.6)	38(21.1)
色を作す	24(13.3)	131(72.8)	6 (3.3)	3(1.7)	7 (3.9)	9 (5.0)
臍を噛む	55(30.6)	6 (3.3)	39(21.7)	17(9.4)	19(10.6)	44(24.4)
大目玉を食う	15 (8.3)	25(13.9)	15 (8.3)	1(0.6)	99(55.0)	25(13.9)
合計(平均)	113 (9.0)	208(16.5)	344(27.3)	54(4.3)	323(25.6)	218(17.3)

注1) Kの回答数の合計は1260個(100%)である

注2) 表には韓国語の言語表記を省略し、著者による日本語訳だけを記す。

まず、「肝を煎る」におけるKの答えを見てみると、怒(35%)、嫌(26.7%)、驚(26.1%)の順になっていることが分かる。これは‘肝(간・담·쓸개)’が用いられた感情表現が韓国語にもあり、それらの多くが嫌(不満)や驚(恐怖、驚愕)などの感情を表しているためであろう。このように、韓国語の固有表現であっても日本語と同じ構成語彙を持っているということで、母語転移による誤りが予想されるものには「臍」が挙げられる。韓国語で臍が使われた慣用表現⁽⁶⁾は三つしかなく、それらの全ては喜の感情を表す。

本調査のうち、「臍を噛む」に対しKの30.6%が喜の感情であると答えたのは、怒を表す韓国語の固有表現である「열을 받다(熱を受ける)」に対し、Jの50%が喜の感情であると答えた結果とも一致するところがある。ここで、慣用表現における負の転移(negative transfer)は、それぞれの使い方の幅が限られた構成語彙である場合であるほど、母語の慣用表現での頻出度が低いほどよく起きることが分かる。

一方、「目を剥く」を見てみよう。「目を剥く」の慣用的意味を推測する際、Kの答えはある一つの感情に集まらず、驚(33.3%)、怒(27.2%)、嫌(22.2%)などにばらついている。韓国語の慣用表現のうち「目」の頻出はもっとも多いが、「剥く」に当てはまる構成語彙はあまり見当たらない。

日本語の怒の感情表現に対し、Kの答えが他の感情の方に片寄ったものは「大

目玉を食う」と「色を作す」がある。叱責される際の感情を表す「大目玉を食う」には驚(55%)の感情が、「色を作す」には好(72.8%)の感情であるという答えが多い。特に具体的な色を表さず、怒って顔色を変えるという慣用的意味を持つ「色を作す」に対し、Kの86.1%は喜や好の感情であろうと認知している。このように慣用表現における負の転移は、それぞれの構成語彙の使い方や頻出度のみでなく、構成語彙の間の意味関係によってもよく表れると言える。

4. 3. 3 日本語の固有表現におけるkaとkbの比較分析

ここでは、Kの答えをkaとkbに分けてより細かく分析してみよう。下記の〈表6〉は、怒の感情を表す日本語の固有表現におけるkaとkbの回答数をまとめたものである。kaとkbの平均正解率はそれぞれ16.5%と38.1%となり、その開きはかなり大きいと言える。

〈表6〉 日本語の‘怒’の固有表現におけるkaとkbの回答数 (単位: 個(%))

‘怒’の共通表現		kaとkbの回答数					
		喜	好	怒	哀	驚	嫌
目を剥く	ka	4 (4.4)	3 (3.3)	17(18.9)	8 (8.9)	32(35.6)	26(28.9)
	kb	3 (3.3)	11(12.2)	32(35.6)	2 (2.2)	28(31.1)	14(15.6)
腹が立つ	ka	4 (4.4)	6 (6.7)	11(12.2)	3 (3.3)	52(57.8)	14(15.6)
	kb	4 (4.4)	5 (5.6)	68(75.6)	2 (2.2)	11(12.2)	0 (0.0)
肝を煎る	ka	0 (0.0)	4 (4.4)	25(27.8)	12(13.3)	22(24.4)	27(30.0)
	kb	0 (0.0)	4 (4.4)	38(42.2)	2 (2.2)	25(27.8)	21(23.3)
頭に来る	ka	2 (2.2)	11(12.2)	30(33.3)	4 (4.4)	18(20.0)	25(27.8)
	kb	2 (2.2)	2 (2.2)	63(70.0)	0 (0.0)	10(11.1)	13(14.4)
色を作す	ka	14(15.6)	64(71.1)	2 (2.2)	3 (3.3)	3 (3.3)	4 (4.4)
	kb	10(11.1)	67(74.4)	4 (4.4)	0 (0.0)	4 (4.4)	5 (5.6)
臍を噛む	ka	17(18.9)	4 (4.4)	17(18.9)	9(10.0)	16(17.8)	27(30.0)
	kb	38(42.2)	2 (2.2)	22(24.4)	8 (8.9)	3 (3.3)	17(18.9)
大目玉を食う	ka	5 (5.6)	10(11.1)	2 (2.2)	1 (1.1)	54(60.0)	18(20.0)
	kb	10(11.1)	15(16.7)	13(14.4)	0 (0.0)	45(50.0)	7 (7.8)
合計 (平均)	ka	46 (7.3)	102(16.2)	104(16.5)	40 (6.3)	197(31.3)	141(22.4)
	kb	67(10.6)	106(16.8)	240(38.1)	14 (2.2)	126(20.0)	77(12.2)

アンケートに用いられた慣用表現のうち、「日本語教育基本慣用句二〇〇句⁽⁷⁾」の「基本五〇句」に入っているものは「腹が立つ・頭にくる」である。「腹が立つ・頭にくる」に対するkbの答えはいずれも70%以上となる点、kbにとってはこの二つの慣用表現の学習が既に終わったと考えられる。

しかしkaの場合は、「腹が立つ」に対し怒(12.2%)より驚(57.8%)の感情が多く、「頭にくる」に対しては怒(33.3%)の他に嫌(27.8%)や驚(20%)

などの答えも少なくない。そこでkaにおいては「腹が立つ・頭にくる」の学習がまだ始まっていないように思われる。もし、これらの感情表現の学習がkaにおいても行なわれたり、もしくは行われている途中であるなら、表6に示されたkaとkbとの正解率の開きが説明できなくなるであろう。

kaにおいては「腹が立つ・頭にくる」の学習は行われていないにもかかわらず、「頭にくる(33.3%)」の正解率が「腹が立つ(12.2%)」より三倍ほど高く測定されている点に注目したい。つまり「頭にくる」のように、怒の感情が熱や火、血などに譬えられ、その怒りが頭のほうに込み上がってくるという表現は、日韓両国が重なり合っているところであり、これが正の転移(positive transfer)を引き起こしたと考えられる。

しかし、怒の感情を表す慣用表現のうち‘精神が腹のなかに宿る⁽⁸⁾’という「腹の文化⁽⁹⁾」は日本特有のもので、韓国語には類似表現が全く見られない。横山(1975)は、「腹」ということばほど象徴的な意味に使われるものはないと言い、「腹が立つ」について次のように述べている。

腹が立つは平安時代ごろから使われた表現法で、類聚名義抄にも「怨 ウラミハラタチ」と出ている。その他「腹ふくる」「腹をすえかねる」「腹の虫がおさまらない」などが憤慨する意に使われたのであり、「腹にすえる」「腹をいやす」「腹いる」はいずれも反対に怒りを静める方である。⁽¹⁰⁾

その他にkaよりkbの正解率が高いものは「目を剥く・肝を煎る」である。これらの慣用表現におけるkaの答えは、それぞれ驚(35.6%)と嫌(30%)である。これに比べ、kbの答えはいずれも怒の感情が多いが、その正解率は40%前後で高くはない。また、日本語学習段階を問わず、全学習者において認知しがたい慣用表現には「色を作す、大目玉を食う」が挙げられる。「色を作す」は70%以上のkaとkbが好の感情と答え、「大目玉を食う」が驚の感情を表すと答えたのはkaとkb両方とも50%以上に達する。

5 まとめ

本稿は、日韓両国語の怒の感情表現を中心とし、日本語母語話者と韓国人学習者が両国の慣用表現をどのように受け入れるのかを比較分析したものである。本調査によると、怒を表す慣用表現のうち身体語彙が用いられたものは両国とも70%以上であり、各々の構成語彙や形態的特徴の全てが一致する共通表現は28.5%を占める。また、怒の感情が「血の逆流・熱・火・爆発・色」などに譬えられる点は両方の固有表現でもよく見られる。

本稿で指摘した通り、韓国の「한(恨)」や日本の「腹の文化」などにはそれぞれ

れの特有な感情がこもっているわけで、それによる発想の違いが負の転移をもたらし、それが慣用表現の学習能力を阻害する原因となる。従って、慣用表現における母語の干渉的誤りを減らすためには、構成語彙の統語的な特徴よりも、各々の慣用表現にこもっている感情構造を比較分析することが必要である。そこで本調査は、身体語彙に焦点を当ててきた従来の慣用表現の研究に対し、人間の感情表現に焦点を当て日韓両国語の比較分析を試み、その認知様相を明らかにしたところに意義がある。

また、日本語学習段階に沿った慣用表現や教授法を研究する際、初級者と中級者との間の母語転移の傾向差を用いることは学習効果を高めるためにも必要である。そこで、本調査で示したような韓国人学習者の認知様相の傾向をさらに調査研究し、他の基本感情での母語転移や認知様相などを明らかにすることを今後の課題としたい。

注

- (1) 転移 (transfer) には正の転移 (positive transfer) と負の転移 (negative transfer) があり、正の転移は習得を促進するが、負の転移は干渉的誤り (interference) を引き起こすと考えられた。母語と第二言語がある程度類似している場合に転移 (transfer) が最大となり、両言語の構造が異なっている場合は干渉が和らぐという分析は、多くの先行研究からも明らかになったことである。
- (2) 編集委員会 (2001)『日本国語大辞典 (第二版)』9巻 小学館 p. 878
鎌田正 他 (1982)『大漢語林』大修館 p. 514
- (3) 金香淑 (2003)『韓国語 感情表現 慣用語研究』韓国文化社 p. 49
- (4) 本稿で「共通表現」とは、両国の慣用的意味のみでなく、慣用表現をなしている各々の構成語彙や形態的特徴の全て一致するものを言う。また、「固有表現」とは、日韓のそれぞれの言語でしか使えない慣用表現を示す。
- (5) 金泰憲 (2001)「隱喻의 身體的 經驗과 文化와의 關聯性 研究」啓明大學校 大學院 英語英文學科 博士學位論文 p. 60
「中國語の怒りは‘顔色の赤, 青, 白’に表れるが、韓国語の怒りは‘白’に表れない。但し‘青’と‘赤’が共に使われる場合 (例: 그녀는 화가 나서 얼굴이 붉으랴 푸르랴 했다 ‘彼女は腹が立って顔が赤くなったり青くなったりした’) はあるが、‘青’が単独的に‘憤怒’を表すとは言いがたい。顔色の‘青’は‘怖’を表す。」(韓国語の原文を日本語で訳す)
- (6) 林八龍 (2002)『日・韓両国語の慣用的表現の対照研究』明治書院 p. 252
「배꼽을 쥐다 (臍を握る→‘おかしくて大変笑う’), 배꼽을 빼다 (臍を抜かす→‘おかしくて大変笑う’), 배꼽이 웃다 (臍が笑う→‘呆れててどうしようもない’)」
- (7) 宮地裕 (1999)「日本語教育基本慣用句二〇〇句」『敬語・慣用句表現論』明治書院 p. 322-328
「腹が立つ, 頭に来る」は「日本語教育基本慣用句二〇〇句」のうち‘基本五〇

句’に入っている。

- (8) 芳賀矢一 (1911)「身體に關する色々の言い廻し」『学生』富山房 p. 39
- (9) 立川昭二 (2000)『からだことば』早川書房 p. 33-34
「日本人には‘腹の文化’と‘胸の文化’という二つの文化があった。そして大きく分けると、‘腹の文化’はどちらかというとな民衆的なもの、‘胸の文化’はどちらかという体制側、知識階級的なもの…(中略)。ところが胸とか腹に宿っていると考えていたから、おそらく江戸時代までの日本人は、胸で考え、腹で物事を決めていた。」と述べている。
- (10) 横山辰次 (1975)「国語の慣用語」『覆刻文化庁国語シリーズⅧ 語源・慣用語』教育出版 p. 151-152

【用例資料】

- ① 小説類 (五十音順)
- ・『女たちのジハード』(篠田節子)・『五重塔』(幸田露伴)・『雁』(森鷗外)・『銀河鉄道の夜』(宮沢賢治)・『ゴールドラッシュ』(柳美里)・『潮騒』(三島由紀夫)・『千羽鶴』(川端康成)・『山月記』(中島敦)・『N・P』(吉本ばなな)・『春』(島崎藤村)・『秘密』(東野圭吾)・『冷静と情熱のあいだ Blu』(辻仁成)・『冷静と情熱のあいだ Rosso』(江国香織)・『ロングバケーション』(北川悦吏子)
- ② 辞書類・その他
- ・『日本語慣用語辞典』(米川明彦他:2005)・『広辞苑 (第五版)』(新村出編:1998)
 - ・『天声人語』(朝日新聞論説委員室:vol.140-144)
- ③ 韓国語の用例
- ・小説類 (①の翻訳書)・『韓国語 感情表現 慣用語 研究』(金香淑:2003)

【参考文献】

- 鎌田正 他 (1982)『大漢語林』大修館
- 河原修一 (1998)「感情を表す日本語の言葉」『国語国文』第 23 号 金沢大学国語国文学会
- 立川昭二 (2000)『からだことば』早川書房
- 中村明 (1979)『感情表現辞典』六興出版
- 芳賀矢一 (1911)「身體に關する色々の言い廻し」『学生』富山房
- 編集委員会 (2001)『日本国語大辞典 (第二版)』9 巻 小学館
- 馬場典子 (2001)「怒りの直接表出表現 ‘ハラガツ・アタマニクル・ムカツク’ の意味分析」
(2002)「‘腹が立つ’の動機付けに関する一考察」『言葉と文化』第 3 号 名古屋大学大学院・国際言語文化研究科
- 宮地裕 (1999)『敬語・慣用語表現論』明治書院
- 米川明彦 他 (2005)『日本語慣用語辞典』東京堂出版
- 和田節 (1969)「からだことば考」『思想の科学』94 思想の科学社
- 金泰憲 (2001)「隱喩의 身體的 經驗과 文化의 關聯性 研究」啓明大學校大學院

英語英文學科 博士學位論文

金香淑（2003）『韓國語 感情表現 慣用語 研究』韓國文化社

宋誓天（2005）「韓國語の日本語教育における慣用語の研究」『日本文学研究』第40号
梅光学院大学日本文学会

林八龍（2002）『日・韓國語の慣用的表現の対照研究』明治書院

Kövecses, Z. 1995. Metaphor and folk understanding of anger. In Taylor, J. &
R. e. Maclaury, ds. Language and the cognitive construal of the
world. Berlin : Mouton de Gruyter.